志野の夢

宇治巻　二

哥を名ごせつし

[V. 46]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 46
copy 1
Asian
Japan
Case

2004551302

二月の廿日の程に、昔アマの家ゝ川をよまうで給。
古きは鞍（ぐん）なりけれど、おぼしもさで年ごろに
なりにけるに、宇治のわたりの山中やどりのゆゑし
さに、おぼくいもよほされさまへるなるべし。うら
やしといふひともありけり。星の名のなべてむ川
よしうおぼさるゝなもちゐるしや。上遊（んごちめ）アいせう
あまるつうまつり給。長どんだにいさゝりも
いたずせに物ゝ人すくなくつうまつれり。六条院（源）
よりつゝりて、左（夕雰）の大長さり給所は川よりさちに
いとひろくおもしろくてあるに、山儲（まうけ）をさせ給へり。
おさゞも（夕）人（旬ノ）されば世人にまつりなべくおぼし

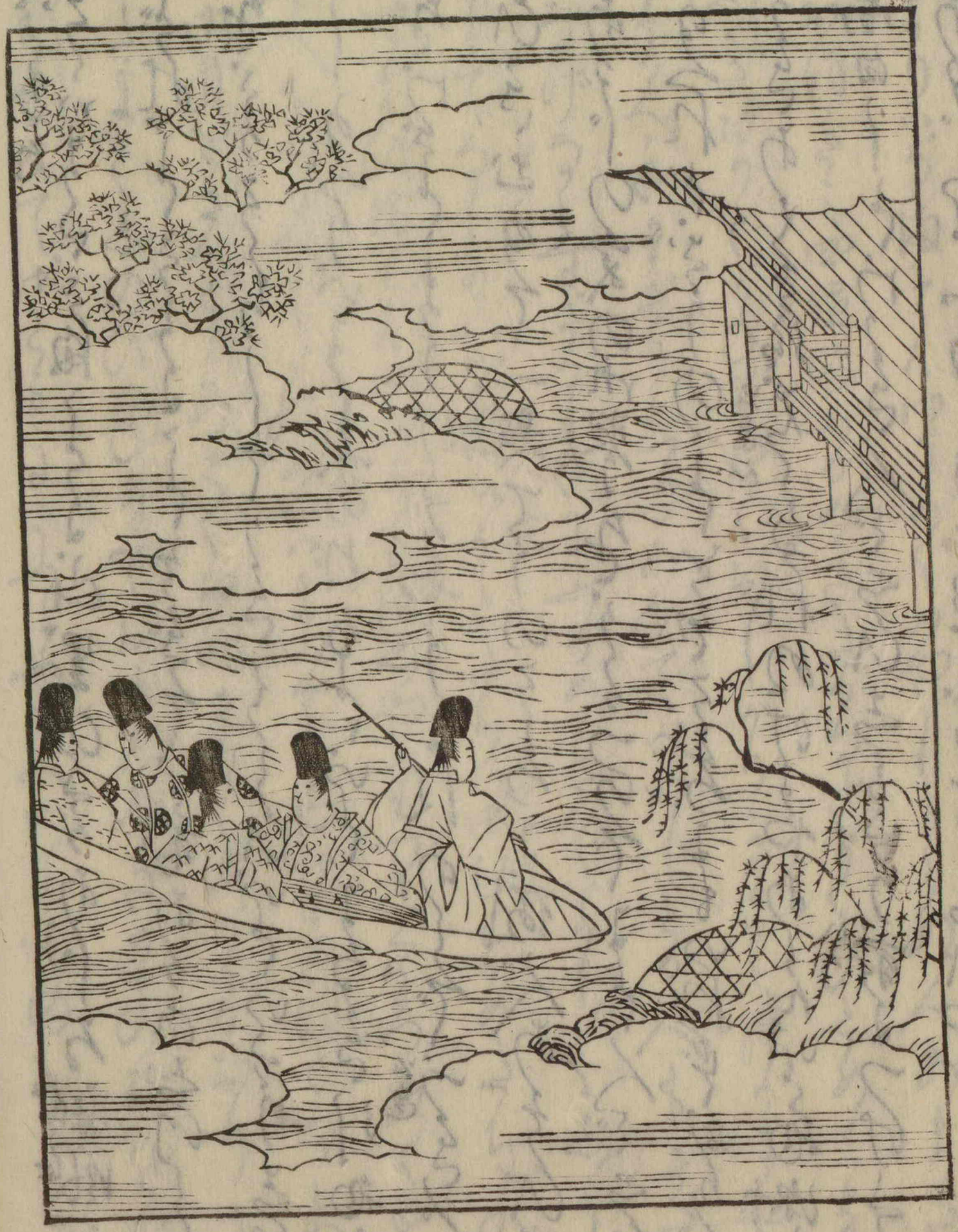
ゑる代。縁(よはり)なるは物忌(ものいミ)の。せもくつゝしきのべく申さ
なれば。えまゐらぬよしのかしこまり申なり。定(白ん)なる後
すき後じとおぼしたるに。宰相(茎)の中将。今日のは
せかへに来りあひぬへるに。中(白ん)こころやすくて。
かれはたりのかしこまりもつゝへよくんとは心ゆゑ思。
おさゞをばうちとけてこしまゐらしとくしき
もれに思ひさゝしぬへり。は子(ミこ)の公達(タノ子たちこう)。右大弁(うだ)。侍従(ぢじう)の
宰相(さいしやうづん)。権中将。頭(とうの)お将。蔵人(くらふど)の兵衛(ひやうゑ)のとけるど。これ
さふらひ給。みかど舌(きはさ)もころことにせつかしぬへる。定(白)
なれば大かたのは見しもいと限(かぎり)なく。よいて六条院(ほ)の
はかなさ後はうきぐの人もこれはたゝしの君に

こころよせつつうまつり給。前にりつけたる御志り
らひなどおかしうしられしてごすぐろくさぎ此がん
どもなどさり出て。こころぐにまとさひくらし給つ。
白 宴いなしひ給ひ御あり。さまなるやましくおぼさ
れて。こくにやすしちむの御こころもふかれば。うち
やすをのて。夕つるこぞ御琴などめしてあそび
給。れいのかうせぐなれたるところも。水の音もと
てもやして。ゆれく音すこまさうこちして。
かの 波ひぢりの宴 八文 にも。こごさしけろほどなれば。とひ
風に吹くるひぐこ波字給ふ。八ん 笑りしのことおぼし
いでられて。詞 笛 十六 をいとおかしくもつさとかしたるう

かれ・されなるん・昔(むし)の六条院(ほ)のれ笛の音四十志は・いと
おかしげにあいげつきころ称にこそ吹給しが・これも
すこのぼりてごとくしきけのそひたるは・ちじのれ
とぐのれぞうの笛の音にこそまさなれなど・独ごち
おくれ・哀にひさしくなりにけるや・かやうれあそび
などもきで・有にもあらで・色しきにけるとし月の・
さすがにあはくかぞへらるくこそかひなけれなどの給
ついでにも・姫(ハム)ぎさちのれ有信あそしく・かろ山ぶ
ところにひきこめてハ・やまずもがなとおぼしつ
けらる・宰相(茎)のきこのあるじうハちりさゆりまて見
まほしげなるをさしも心よろまじかめり・まいていま

やうの心あさからん人とばいかでかなどおぼしえざれ。
いれぐとちぶめ給ふ。白ん ところは雲の東もいとあしがる
こゝはこゝろやすめへり 接ひのやどりは忍ひのまぎれ
まいとさう明ぬうこゝちして。あかずかへんこと
と白 宴はおぼしてくらぐとかすゝいたれうそらに。散
様あれば今ひらけそむるなど。夕々見いたさるに。
河そひ柳のおさかしちびく水かげなど。そろう
ちらずおかしきは。こちらひのうちぬ人もいとめづら
しくこゝ 様がたしとおぼさう。宰相 葉ん もかうたりを
すぐさずかれ 宴 へまうでゞやとおぼをど。おまへの
人めばかざて。ひさり漕 こざ 出給ふん舟 ふな いたりの程もかろ

ふるやとちひやすしひ給行まかれよりいでてあり
山風は霞をさそふと思はあれど備てこゆる
そらのきし波ざりはいとおもしろうさそへり泊や
おぼえをおそりとこゝろまへだいとおもしくおぼひて。
これすれいりは我きんとて
遠をの汀の波はつゞ川舟ちるば吹よへ寄浴
の河風。中ねはまうで給。おそびはこゝろはれたるさん
ざりさそひて。さしやつま給行かんすいらくあそび
て水はのぞこまうらうる。うくりおもろしさか橋の心
だへちをじ。さうくるはいとおもしう故あかえなれば。
人ぐ心して舟よりおり給



こゝいまゐらする海こゆる山里びたるおもしろ屏風(びやうぶ)な
どれどもさるはことぞそて家おもはれもりしひ
をさなちらしてさきもしひびといふうもれ
しめやかへのねあたりまゐるさ引地だ
をけざしまうけろやうすはあそでうさく(公達)
ひきむすて一越(いちこつ)でうのころは揚人あそび給
おもじの笙の和琴(きん)をさうつつでまたくべさひ
のちれどぶきうのことぞころはもいれぬどおりく
うきおもを給がてるれめけやあんうら袖深(ふか)く(公達ん)
面白しとうきんぐせひまうり家まつけさろ
おもじひとおうしうまあてぞうそてはさひやうし経

ありはな雨そんいうめくいやしうぬ人あまた
おほさこ四位のかうめさこうなどうくひとめこうな
べさおりとうひていとおしがりさてけうまや
さうべさうざうまりあひてへいじとう人もさる
なげなしずさうるまかうめさてよしくしう
もてなしかへり雨らうとこちはれむとめこちの
すまひ給ふんれけりさ雨しやまつころ行くを
人もあるべしかれ宮(白ん)はまいてかやすさほどなるぬ
れ身をさへざころさくおぼさうる候かうおりま
ざまとしのびかひかておもしろさ茶の枝をれ
らせ給てれともまさふふうへいしものおりしさ

してさてまつり給

白 山ざくらはふあらりは君さておるじうぎ

しとありてげるに聞を地むつましことやありけん。

八 れかくりはいかでかはちまど罪くはくあばしまじ

らふかうおりのことけぎとがましくもてなし

ほどれかうも中こまくさことはるんし給しなど。

かうべども罪ゆれば中の君まぞかうをなり給

八 うぎしおう菅のうさうは山がりのうさ○を

きぬ妻のうびへ聞はかてしもとぴとおりしげは

らうくしくうさまくりげ地は川風もこころりり思

さ夜は吹かうふもれて者どもおもしろくあそび給。

さ夜に吹かりふ。もれ者どもおもしろくおもひ給

白ノ
れむ人に藤大納言（とう）（和様右大臣之）おほせごとにて来ぬ人。人ぐ
あまたく来りつどひ。もれさはがしくてきおひ人り
給ひけるさ人ぐあるぞ人りこのこをられけり。宮（白ん）をまた
さるべきついでしてとおぼして。菜盗（地ざかり）にて四十の霜も
ちがめやるほどのこゝあるまゝしのもやまとのを
奇どもおほかれどうるさくてさぞ。もきぬなり。
もれ（白ん）さはがしくてしふまくにもえいひやしぞなり
ましをあるぞ宮（白）はおぼしてしるべなくてもれ文を
つねにありけり。宮（八詞）もなほ（姫宮に）こしえぬ人。けぎとけさう
ごちてもまてなきじ。中こころときめきにも
ぬべしいとすきぬるみ（白）こなれバ。うろ人なぞ

きく給が（自ノ）程もあらぬすきひなりと（八ノ）そぐのし給
時ぐ中の君ぞ望し給（大君）姫君にやうのこと。こゝはふれ
まも。もてきるれぬへるれこゝろふかきなり。いけと
なく心ぼそきれなりさ海に（蓋）のつれぐをいとぐ
くしがこゝるがめ給。ひびまきり給れさ海ろうち
どもいよく海さりおらまほしくおりしきも（八ん）中こ
ころぐるしうゝほまもおもをましかば。あらう
しくおしきゝのしいうすくやあらましなど。
明蓋おぼしこゞろおほこぎこ女女中の君女三まぞ
故給けり。（八）宮ハをもくけしこゝぬべきとしなりなり。
（八ん）物心ぼそくおぼして。れをてなひつねよりもこゆこ

なくしき給世にころとどめ給ひしのが出こちいそぎ給
のこゝあばせば涼しき道にもをもむきぬべき給
こゞろ此れことゞもまいとくおしくかぎりなき此心
づよさなれど必今いとこすて給いんれこころも
こゞれなんと云なり人もなしたりこゝゆる給
あばすき後にはあらずともなれめまさても人にて
くちあしりまじうこゆるされぬべきてものひと
のまぞころにうしろこゆたんなどしひよりこゝゆる
あらばしらずがれまてゆるしてん一取世に住つき
給よすがあらばそれをこゆづるゝにあるぐさめ並
べきをさまでかきこころに弱きゆる人もなし

まれくはたらるまきこゝろよすきごときこゝろなど
すゝ人は文ワかくしき人のこゝろのすきひまもれ
まうでの中やぞり。往来(ゆきく)のほどのちをざりごとに。
そしきばこゝかけてさすがにうくちるがめ給有様など。
としもりあるづゝもしげにもてなすもめぎ海
しうてなげのいへをざるをきせ給ひず。三句文ぞ
ろ給ふでいやまじとおぼしてれこゝろふかりけるに。
さうべきまやおりしけん。宰相(さいしやう)の中将(蓋)。其秋(そのあき)。中納言に
なりぬめいとゞ白ひまきり給。世(蓋人)のいとなきこゝにそへ
てもおぼしてことおほかりいかるうことくいぶせく
ちひけうりし年ごろよりも心ぐるしうて。すぎ(拍来)

給まけんいましへざ海の思やるくまゝ。けしきうろく
なり給ぢうりとてちひもを海ほしくなん。彼老人(弁)を
い衰なるも此まゝとさていちぢるさ海なるしず。
とうくまぎらりつゝ心よをとゝひ給。字治ま
まうでくひさしう成まけり紙也出て京なへり。七月
ぢうりまなりまやり都まはまぎいりこゝぬあさの
音色を青羽の山をくに風の音もいとひやくなる。樵(まさき)乃
山べもけづる文付て。猿こづねさうるまおかしう
めづらしうおぼゆる紙宮(八ん)ハまいて。れいよりもまち
よろこび笑しめて。此度(こび)ハ心ぼそげなる物ぢいと
おほくト給。なるらん(詞)ね。これ君ぢちをさるべき物乃

こゝろにもとつゝひ。おすてぬ身れにかゞすまへ。のへ
などおもむけつゝきそくのへだ。一ことまてもうけ
ゝ面ちりをきそしかゞさしまふのへをこゝろまじく
なん。世中に心をとゞめじとちぶき侍る男まて。何
ごともこれもしげるきおひさきのすくなきなん
侍れど。さうるまてもめゞくひ侍らんかぎりもか
くしぬ心ざしをれらんしじ志らきんとなすん。おふ
かゝるなどきそくのへだ。八ん うれしとおぼひこゝろも。東
かゝき月のあきらかまさし出て山のはちかき
そちするに。わんぞいとあれに志まて。若身れ
ごとりし給。八羽 ぶ比の世をいかゞ女まくらん。九主 くづし

なぞまてかやうなる秋の月は此前のれあそび乃
おりまさふらひあひたる事は物のどまとおぼしき
恨（うざり）どりぐまうちあるをたるひやうしなどことく
ことしきよりもよし有とおぼしある如此更衣乃
此つぼ口つぼ口のをのがじくいいどましく思うたべ
の情（なさけ）をかたすべかめる後夜ふるき程の人のけし
めりぬるがごろやましくかいしらべほのるほこ
ろび出たるもれて者なぞさくどころあるがおほ
かりしかれなるまごとしまも女はもてあそびのつまる
しりべく抱たるるき抱かゝ人のころをうごかす
くさたひまるん有べきされバつゝのふるきまや

あらん。子の君のやう後世やるまも。そのこはいと志を
おやのころ後こぶさずやあらん。女はうぎりありて。
いふかひなきかたまおもひすけべきまも。程いとこ
ろぐるしうべきるど。大方のことまつけての給へる。
いかぐさ（葉公）おぼ（ハノ）けどらんと。心ぐるしく世やらるく此心
のうちなりすべて（葉詞）後ことまさかおもひ女へきて
さるけまや給らん。こげからのことまてはいかまも
いかまもふうせきるかたの給しめ後げまとしか
なきことなれど。こ思まめづかろこそそむきぐる
きことは給りそれ。さうしうひぎりぐろ。をうもされ
ぐやさちてまひ給りけんなど。まておかず一こ思

きくしれことの日をぎちまゆしがりこまへだ
八公
うとくしらぬもじめまもとやおぼましんれ
ぶりしあるこまへぬてぎちまそぐのしきこと
姫宏
給さうのことをぞいとほのうまうさるしてやこ
八詞
給ぬるいとぐ人のけちひもたてあれるるゑ
宇色あのき夜まつぎとちまきれあそびの心まへて
姫宏達ノ
おしうおぼゆれどうちとけてもいかでかはひさ
琴を
あちを給えんをのぶりしかぐりおしそめ川る
給りはよぐもれふぎちまゆづりきこしてんとてこや
八
も佛のれ前まへぬひぬ
我なくて草のいほりはあれぬ其一ことは

かれじとぞせふかう對面(ぶめん)もけ度(たび)やかざりあるんと
地心ぼそきる遊びかたそうくるしさひがとおほ
くもなりぬかかれとて。うちなさ給。(慧)まちうと
(慧)いうるんせまかれきんなかさよれちぎり
むすべるくさのいほりハ。すまひ(詞相撲)など。おほやけごと
どもまぎれ行かころあるて。ゆくんなど。四丸給。なる
まてかれとうず鎗(ぐり)のふかべめし出て。おりおほかな
地鎗などをさせ給。へがこの身は人間なくさし
へて。すきかげを海めしきよ。君ぐちもおくまり
ておりす。世(慧)のつねのけさうびてゆあらず。ころふかう
地鎗のどやかまきくしてもれしまへだ。大さう

べきれいしんなどこそしなふ三宮いとゆかしう
おぼいたるもれをと心(慧ん)のうちにはさ出けに。けがうろ
ちがふ。ぢ我人にはことなりかし。さばかりれうろ
もてゆるひ給ことのさしもいそがれぬよ。なそてなか
れて。たゞ。あるまじこさとくそさすがに覚えぞ。
かやうにてもれをも罪しかたし。おりふしのそれ
もみぢにつけて。衣をもちなさけをもかよそすれ。
まくかしぎもれし給あたりなれば。すくせことにて。
ほかぶ夜にもなり給ひんはさすがにくちおしうる
べく。つもやうしごろこそちしそるを。まぶ夜
ふるさ程にかくりなぬ心(八ノ)ぼそくありなげにおぼい

たりしれそしき後。せ出きてし給ひしさはがしき
程なしてまうでんと覚え。白 普賢の文もはあきの
ほどに。紅葉こまおりしまきんと。さるべきついでを
おぼしめぐらす。れ如こはこうずなり給。中宮 なんなく
まめやかにおぼすらんともせひ給えれど。わづら
そしろもあらで。ちるまき夜にもてなしけ。
おりくに罪しうちし給。おきゆく奴もまくり。
八ん 家はいうじう抱心ぼそくおぼし給えれば。例の 老づ 勢なり
所にて。念佛をもまぎれなくをんとおぼせて。君遅
まうこさるべきことこさらし給。八詞 世のことくして。つねの
見れをのがれぬけざちあれど。せちぐさむかく

ありてこそ。かるしさ浜もさ海をも此なめれ。又こゝゆ
づか人もなく心ぼそげなるれ。有程ども浜。うちをて
てんがいとゞこさしと。されどもさばかりのことり
さ海さげしれて。なかなか世のやこなさへまどもん
がやくなさ浜。かけこなる程ごなさひすける世浜。さり
なんうしろのことしるべきことなはあしほど。我身
ひとつなあらず。宮給ましれなもてふせよ。かなぐ
しさ心どもつひのなかなぼろけのよすがなしで。
人のことなうちなびきこ此山里をあくがれのな。
こゞかう人ならびひとつ契ことなる男と思しなして。
そこなよをけくしてんとしとりのへびこかなしひ

しるせばことはもあらずるゐ年月ぬりまして
女はさるまはしてしるもりていちぢくいとおしげ
なるよそのまどさ後おんざんなんよりるべきなど
のおふ（姫宏達人）どもりくも身のるしむやうまでハおぼしま
ながされぞこぐいりまして〻をれなりては、よま
うさ（とき）咸もながしふべきとおぼしまふくころぼそき
さ後のれおしましどとよいつさなきれ心まどひ
どもはなん（地）ころのうちよこそ忘すて給つしめど、
明堂れうこちしはなるしるいまて、まりは別給
りんハつしさ心なしれど、げようし知しうるべき
れ有様はなん有けるおしいり給えんとての日も、（八ノ山ごとり）

れいなるずゐるとうつすもありこれもさのみてゝ絵
いとまれなるくうりそめれやざりすてすゞひ絵け
ゑれすまおの有様をうつさん様いうしてかへり
うき人のうへこまりてはすゞひ絵かんとおもうて
ぐらつねんずし絵さ後いとゞこゝのげなりおもゐなび
ふう人でめし出でずしるやすくつかまつられ
八句
なるまじとおもひらうやすくよはこゝしあるまじ
きゝふの人ハ素のおもろへもつねのことまておまさ
れめべうありさうこきハまうりめれども人を何とぞ
せいざうしめでうちおしうてさすへん躾うすけ
なくいひもおしこゝうとあんおゐうるべき抽さびしく

ころぼそきよ成ゆるハれいのことなりむまれたる
家のほどをきそのまくまもてなしたるんなん。さて
こくまもけが心ちまもおやまちなくハおぼゆべき。
まぐさもしく人うずめんとおもふとも。それこそ
なまもうるふまじきまとなるしバゆゑくうろぐ
志くおりぬりたまもてなしきたまなおほど乃
給まぐ暁ま出給とてもこゝろまはつりまてなり
らんほどころぼそくおおぼしまびそ心ぢりも
やかそてあそびなどハ志まへなまごともしまえうるふ
まじき世をおおぼしいれそなど。うへりえがちまて
出まぬ。ふてところいとぐこころぼそく。拙なもへいぐけ
姫妻達ん
られて。おきゆしけ

られておきみしひりく。所さりぐあさまし
ましけばいかでかあしかるべき。たまもり本まもらごめ
なさけまして。まことわりやうもあかなどなさけさこ
わがひこゝろみれどもおもめしくもおなじこゝろなる
ちぐさあまりしてゐる給ふ。それをこなひ給ふ三昧。たふ
なりてめくんといひけしさく給ひける給ひし営みまし。八まん
まいりてげきようかくやまゐりてなりん。え宝しめ。風の
とてさかくつくろふやまあれすなる。給ひまおすん。さるは
御ようりもさいめんこゝろまもなさまとせんすへり。
ひのつぶれていふなることをあぜしなけれ。御ず
どうかにわざとあいうそいうこそざきやうせなてなされるなどし給。

八分
二三日はおり給はず。いかなくと人なりしまへど。
八詞
ことなおどろくしくはあらず。そこととなく
くるしうなん。すこしもよろしうならば。いまもん
ぢてあると。云葉にてこそこそし給。おぐりつとさゝひて
つうまつりそり。あさり詞 ちかきはちやこと云ゆれど。
ちぎり
限のこびにもおりしますらん。君道のはるゝ。なまら
おぼしなげくべき。人はこれはすくをといふ事
ことなれば。はゞ心よからんべきことをおりしまうずと。
いよくおぼしもなるべきことを思ひしをせり。
今さらにないで給そといふ事なりけるに。地八月
廿日の程なりけり。大かたの宮の事なもいとぞ

しきに。君ごちゝ和子ぎりのもとゝ君もすく。
ねばしなげきつゝなぐめ給。有明の月のいとゝなる
やうさし出て。水のおもてもさやかなすゑゝる後。
そなるの志とゝあげさとて。三いぐしのゝるり。（姫宗達）
うのゝ忌かするひぐきて。明ぬなりとゝきゝゆう
ほどる人きて。これ夜中（なか）ぐりまなん。うを給ぬ
なとなくくしもと。心（姫宗達）なかけていなとはしえぞ
志ゆくのゝれどうちきて給まは。おさましく抱
ねばしぬこゝちして。いとゞかうことゝまゝなるぞも
いぐちゝいるけん。こゝぐうのぶ。卧（ゆ）のゝり

姫宍進ん
いえじさとともこうめれまへまて。おぼつかなう
ぬこそつひのことなれ。おぼつかなさそひて。お
ぼしなすげくることとりなりしぶしまてもお
くれこそまつりて。世にあるべきもれとおぼしなら
ぬれ心ちどもまて。いうでゝかをくれじとなさ
しづこゝまへど。恨あるなりかれば。なまのかひ
なし。何ぎり年代ちぎりをさ給けるまくに。のち乃
れことをよろげにつかりまつる。姫宍進ん なさ人になりのへ
らん八れさ海ゝちをぞに。今一度こなんとおぼし
のまへど。今さらにあるでうさうことゝも給るべき。
あさり詞
日代も又あひこ給まじきことを四大しきをつれば。

いまはましてうたゝまれ心とゞめ給まじきれこゝろ
づひをなしひのべきまりとのこ四ゆ（姫宗達ん）おりしまし
けれ有様を四ゆまもおぎりのあまりさうしき
ひぢりぢろをまくつくしとなんおぼしけるか
八入ゐのれほいしなりふくおはをしらどうう
（姫と）こゆづる人なきれことだのこすてがこきを八いけるか
うぎりは明暮えさうぎこまりを世る心ぼそきよれ
なぐさめよもおぼしくなれがこくてすぐひなへる
をうぎりあるほまたぶち給も（姫ノ）志てひ給れ心もかれ
ちぬけぎなりなり（慧ん）中納て夜まいきなのていとおへ
なくにかしく今一夜こゝろのどうまてきこゆへ

なくにかしく今一夜こころのとかまてなさせん

かりけりことおほうおりこころこちしておほうこ
世の有さ夜せつぶけられていとじうない給まうこ
あひこんことくらくやなぐの八ノ給しを拾つ手乃此八ノ
心にも朝夕のへぶてしこしめ世のさうなさ候ひと
よりけるおもふおへりしりぼこくなれて、さのふ
と日とせしざりけり候夜くなりずうるしくおぼ
さう。あぶりのもとにも。えぶちのれとふしひもこ夜
やうにさこし給。うろれとふしひなぐ。まこ着づれ
こさてゆう人ぶにまなされ有さ夜なれば。拙（姫宮達ん）おぼし思
れ心ちぞにも。年（芸ノ）ごろのれ心ぐへの衰なめりし
なぐとせもせしり給。よれつねのほぐの別ぐにさし

あたりてハ又こゝぐひなるきやうまのこゝろ人のせひ
まどふ抱なるめる後なるぐさむかたなげなるれ男ども
まて（慧ん）いかやうなる心ちどもしぬふんとおぼし
やまけく後のれけぎたまどあるべきことぐもなし
たりておぎりまもとふらひ給ふまもおひ人ども
まことよきて（ぬ）ず程などのともせひやまゝ
給ふ（姫宮達ん）おけぬ東の心ちなぐら九月まも夜ぬ堂山の
かしきまして袖の時雨をもよほしがちまども
まれがあらそひおけるまの葉の音も水のひぐきも
泪（なこざ）の瀧（しつき）もひとつ抱のやうまくれまどひて（八人ニム）かうでは
いとぞかぎりあらんれ命もしぞしめぐらひ給

ちんとさかへだいころばそくうへじくちすぐ
さめきえてけておもひまどふ。ごてまゐ念佛のそう
きふそひて。おかしまきてうさいはとけをうてそうる
こはりつゝはだえありつゝみまうりし人ゞのわれいこ
まことありさまざりいおそれをなせてあひてるす。
無かの宮よりまふらくとふくひ男し給ふ。さやうの
れうくりるぐ男えん心ちしも去給さば。あばれうか
されば中納言はいうよもおくざるほど。我をべるほど
せまるあるめへるまるあらとうめしくおぼしき。紅葉
のきりよふきるぞつくせ給ちんとてうでうち
給しとうく比りうのれをうえうびんあるさころ

なれば・おぼしとまりて口おしくなん・れ（姫宮達）いみを
そてぬ・恨あれば泪もひまもやと（白ノ）おぼしやりて・いと
おほくうきつゞけまへり・時毎がちなるタつゝ
（白）をしかなく秋の山里いかなんこ萩が露乃
うつ夕蒼・こゞ今の宛の気色を・（夕詞）おぼしたゝぬ
がゆなんも・おまり心づきなくこそあるべかれ・
かれりのべも分てながめくらしろまなんなど
有・（天詞）げよいとおまりたひたしぬやうまでこびくま
なりぬる紙・なる紙罪しまへるど・中の君を例のそゞ
のしてうせなり給・（中ん）かふまでながしへて・硯など
ちくひきよをてうるべき物とやはたし・心うくも

ちくひさよをてこうへ[illegible]

ゐまける日かぎりなくおぼしまゐらさんもり
物こゝぬ心ちしぬへが（双と）としやつまて（詞）稱えそう
き給るまじかれやうくかうおさゐられなどし
給るげに限有けるまこそとおぼゆるもうとまし
くて心うくてとらうさげなる夜になるまゐれ
ておかするもいと（大）心ぐるしう嘗の程よりさける
此つゐひよひをうしきてぞこゝろいかで（使詞）かゝり
ゐらんと（大詞）夜は猿ひしてといたをしまへど（使詞）ふち
かりこそ乗りなめといそげが（大心）いとおしうて
我さうしうしづ然給ましあるひどこ（中と）ひづら
ひぬひて

大

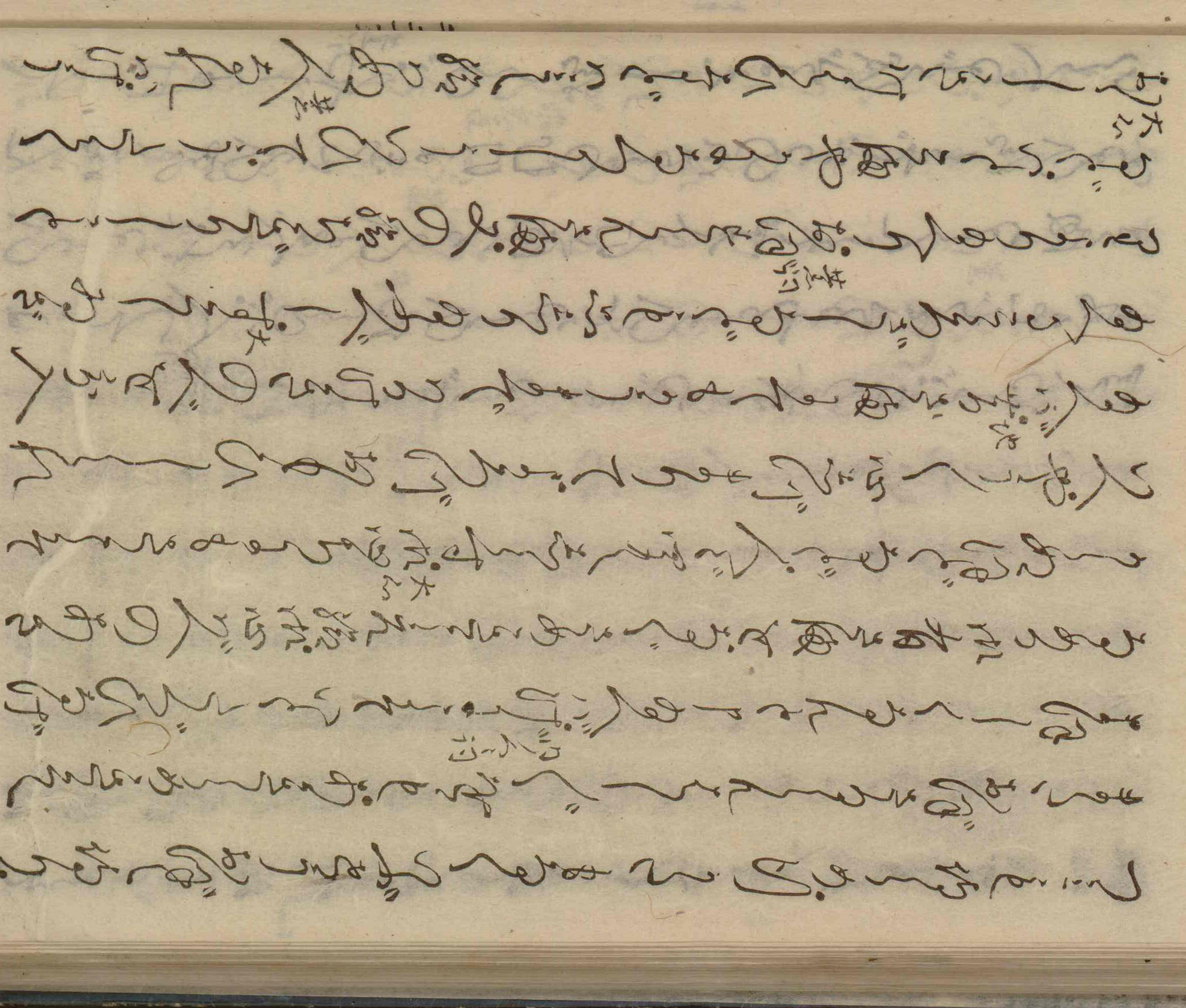
洞のミさりゆるがれる山里ハまがさま床ぞ
もろ声になくらろさかこゝに夜のすこつざもいと
こゞしそれがひさつくろふ所もなく筆にまゝ
きてとしつゝこゝていぐし給つれつゝひハ木幡山乃
程も夜もよゝいとあそろしげなれどさやうの
もれとぢすまじきこゝ紙えり出給けんむつし
げなるさくの人夜とこゝ夜引とじむろほどもなく
うちとやめてがるゝとゝるゝ糸引きぬ

白ノ
れまへまめしていくくめれてまつりこれがゑく
使
めふ。ざさぐ白ん れらんぞしりいあらぬてのい
ますらしおとるびまさりてよしづきころかき
ざ夜ちまど紙いづれかいづれるらんとうちを
とぞれらんじけ。とみまもあほとれごもら
ねがまづとてあきおりしまし。まるれんずる程の
ひさしきはいかぞりれ心まむことるらんとれ
前ちろんぞさくめきつまして。よくこそも。ね地ふる
それがちあり。まぐ。頼ぞりふきあしこま。いそぎ白
おきてなりぬふ
白
頼ぞりまともまぐくきろしれねを大方は

やハ哀ともかく。まろ声えをとゞまじくこれてと
あれど。おほ(中仏)かりさけづむもうちさし。(八ノ宮)こゝろの
れうげなうくろへうちほこみえ所までこそ。何ずなよ
心やすくてすゞつれづれなるよりわなちずへて。
おぼしずるなることのすゞざれ家にてもおもぶうまろ
めるげなのこおぼしめぐりし。おぼされさ海な
さへ。さずやつけなきんと。おすべていとくものしう
おそろしうて。宮(白)し給はず。これ宮おぼせとだく。(姫宮道心)うろ
りまさしおべての海ともおきえ給はずおげの
ちしつきりいあへるれ筆づひ玄の葉をおりしこ
さ海なおな海めきしあへるれけくひさ。おまへいえしつき

給はむ〇どこれにそへめでたきあれとこゝ給ふがゆゑ。
そのゆく（庭訓を云之）くしくるきけわりくまことなきものぜ
たまらんもつきるまき方の者き庭どもあるればあるは
きらびやる山がしぶちてるうしてんとあばせ中納言（慧）
どの流うち汁（だろ）いかれもうもあやうるきは庭は（白きこと）
まことのへごれ（宇治より）うりもひとけうらげまはすらず。
たまへてまひ給れひとまでも。方づうてまうで（慧）
わうり。東のひきしのみぶりある方まやつれておい（姫宗達）
すまはちうちよりまでふうべめし出らるを。（慧）（弁）
やこそまどひまうれあそりは。いとまゞゆくまひ（慧）
こもちてげりおりしきれがゞくまつまうてゞれ（姫宗達）

いとへなどぼだまえし給ふるのばかやうまはもて
なひ給ふで。若のれころむけにしるがひ罪給ひん
さ夜ならんこそ。罪しうけ夜ひかひまべかれなよび
氣色だにこそかつまひをなしひ給ふるべ。へづてに
罪て給らば。云の葉もつゞき給らずとあれば大河おきまし
ういまでなげしへ給るやうなれど。ぶひさ夜さん
かさなき夢にまどされ給りてなん。心より外にも
そらの日かりこし給んも叶くまし。うて。そし
ちかうもえこじろき給しぬと罪しのへれば。蓋河ことく
いへば恨なきれこころのふかきになん。月日のけは
れ心もてぞられぐしくもて出させ給ふぐこそ。



とくすぐろもしくるどはあらねど思ひぬ人まうく
声をきかせなりすぐろまこれこがかまること
ちどもおりつる日ごろを思ひしぐろるもさすがかり
ろうしうてつてましかれどほのかまひとことなど
いふへきそし給ふ海のげまよろげ思ほ是給へる
けちひちれバいと(芸心)衣ときくなり給ぐろき木丁の
すきかげのいと心ぐるしげるるまましておいと
らんさ海ほのうし明ぐれるど忘れて
(芸)気うちうあさぢをこそても雲深(すこぞめ)にやつるく袖を
ちひこそやれどひとりごとのやうまの給へど
(大)色うちる袖をバ寝のやどりまて我方ぞさら

ま悪どころなさ、くつくいとゝ、す忍ハいひけり
ていというじく思がたきけるひまて入なぬなりひき（葉ん）
とゞめちどすべき程ともあれば、あらずあれは
ぬぼゆおいべ（弁）そこまなきれかくりは出きて、昔今を
うきあつめかるしきれ物語ども罪ゆる、なりがたく
あきましきことゞもをもこゝろ人なりそれば、かう
あやしうおとろへたる人とも覚し捨られず、いと（葉）
なつりしうめたゝひ給いけなりし程は、こ院（源氏之）は
とくれなりていうじうなるしこ苑は世なりなりと、
忘しりましけば、人となりけよくひまそへて、
つりに位（ムラの）世中の匂ひも何ともぬぼしぎしまん、ふぐ

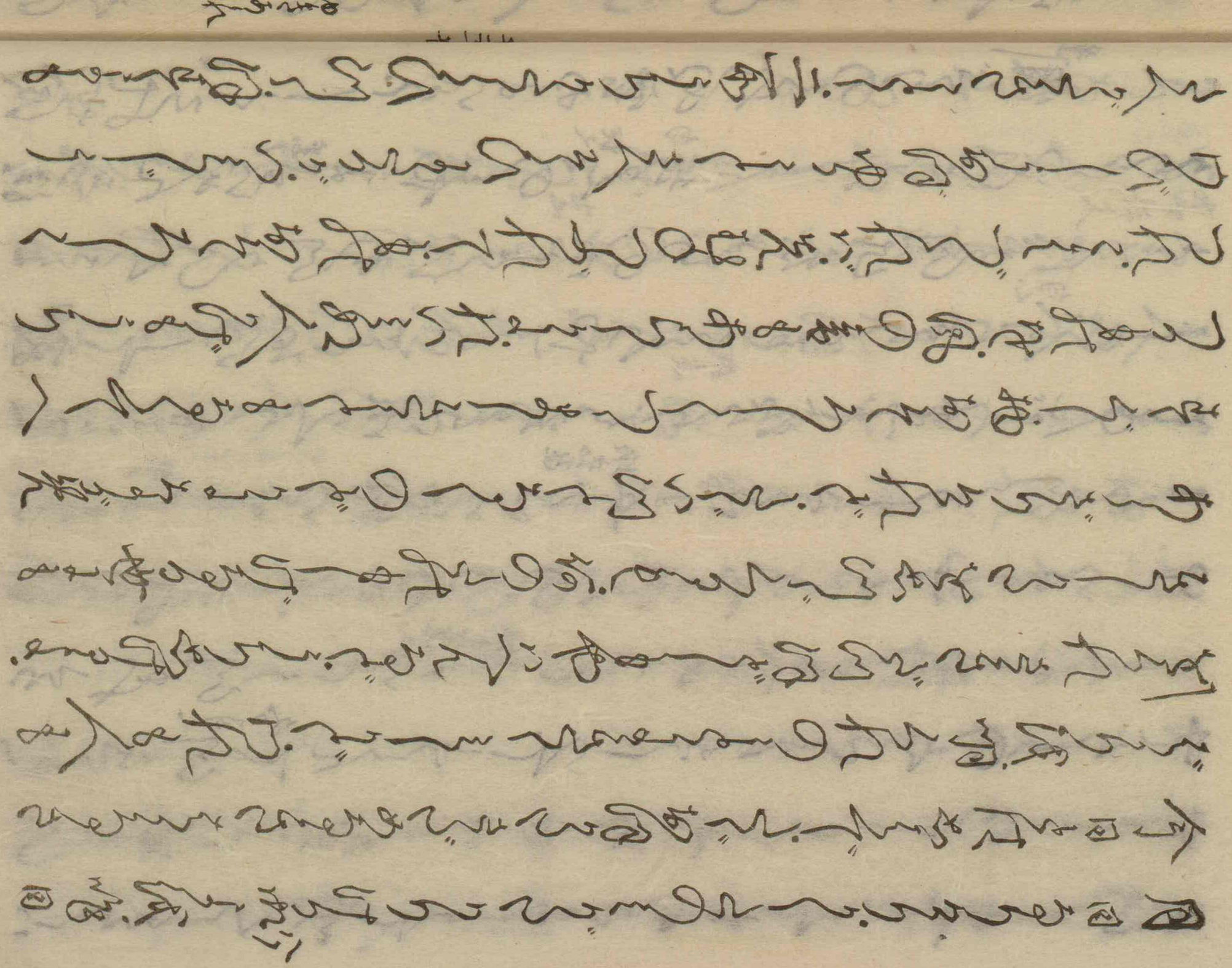
うきたびやたのまれ信おちるぞのこゝろまよふやひまう
しるきうくてるくさいてなりけるは。うらめく
いとしくなりぬるあれ世をよそにてこゝろもきえは
されはされど。こゝろぐるしうて。さよりのへつるれ　明究逢ノ
こえぐるは。涙ぐてるるぞゆかしんいりけくしほさやう　涙ノ　八ノの短ひしるえ
なかれぐ。なぞらへてもがれ涙こそあやまのくずさらえ
うけ涙のつくまはしさるまるんざるは覚ゆるとされ　拍ノ字　なう
物狂ひてしまりいつかぐ世中まなときらめくとも
むかしよりはさりやと打ちさへのすへば。つれ　新
人いまして　いとしくるるきてえまさいしやへずれ　新ふ
けさひるぞのこゝろされうとむかしのまぎくれうち　拍ニ

忘るゝつゝいりしへのれこと後さへ見るをきゝて、さ
こしやしん方もるくおぼれねたり、地これ人年ハかれ
大柏紬のれめれとぞまて、弁ちくいこれ姫君道のさく
小才の母才のおぢ、左中弁(さちうべん)まてうせまけるがこちり
かりさし弁ぞとさき国まあくがれぐら君もうせぬ
て後、彼の柏とのまはうさくちり、此八宮まハ弱ぐりてあら
せ給ちりかりぐへもいとやむごとちりしず、宮(ミヤづん)仕ちれま
されど心りちりしぬ物ハ宮も覚して姫君こちの
れうしろこぶ人まるしまへるちりかり、弁地之しの
君(冷)ぞいさしぐろりく(葉ノことくとき)殺夕まこそてまつりちれ、
ころ備(へぐ)つゝ海るくせ給ひ、ゆり君ぐちまも、一(柏ノしまと)こと

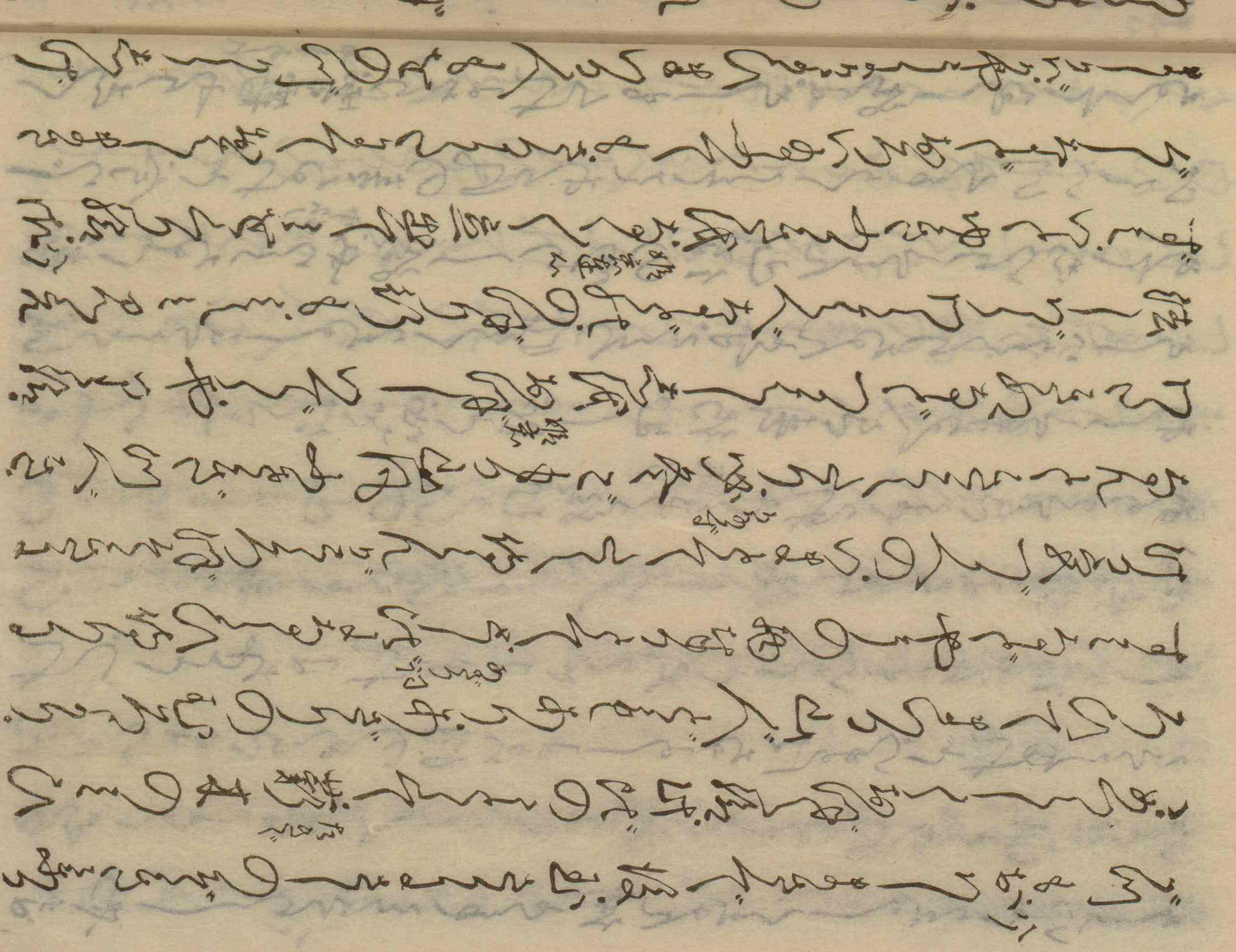
うちいで笑ゆりついでゐて遊びこめたりけれど
中納言の君はふるべのとしすぐしけれいのこ
となれば生しるべてあはしくしうるどいひ
ひろげぎ先いとうづしげるめる心だに見えて
をきあへんかしとしたりしるに見えくも
いとおしろもおぼゆるまでしもてくるれていやま
じとおひらくつまのもるりぬべき今は猿のも
すぐろなるこちしてかへり給ものこれやかぎり
のなどの給しをなどかさしもやさとうちこのこ
てまことなしぎるりにけん秋やハかくれるおまるこの
月かずもへぶてぬ程におりしにけんかたもしれば

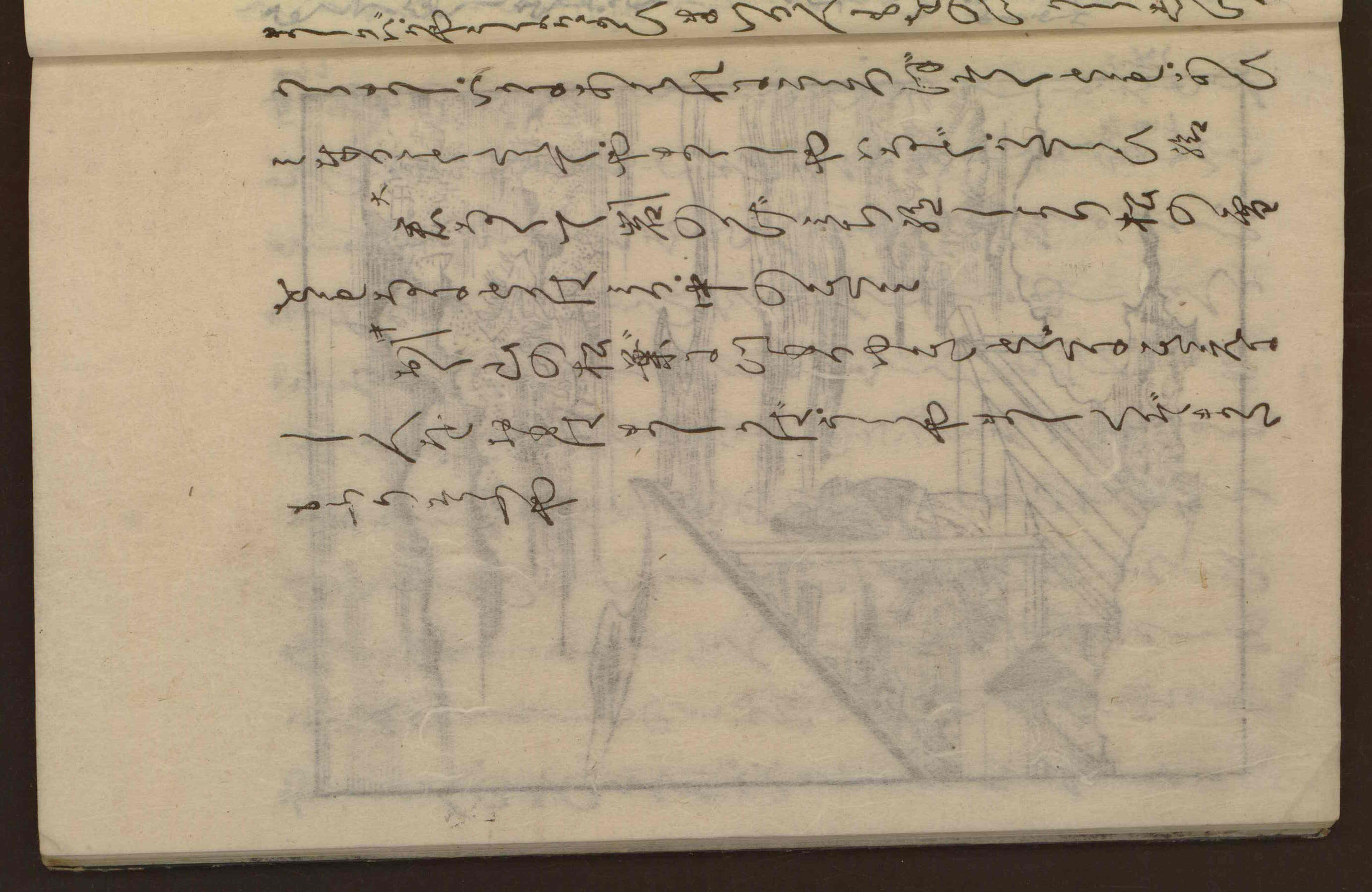
あへるまきけざなりやらとは例の人めいろ此志例ら
ひるくいとことそこぎ給めりしかど、いとまれさよ
げまかさたらひ、あたりおりしくまてないたまへり
しれすまねも犬（とこ）徳たちいでいり、ふるゝかるゝ
引へぐそ、いれれもんすれぐどもるどぞかたし思
さ侮なれど、佛いれ、かれ寺まう例しまりてんと
すとはさしぬりをさく給はもかろ猶の人（僧庭ノ事）かげなまど
さへたしたてん程ど、（姫宮）さまりて也給ふん心ちどもを、
いとはさて給もいとむのいたうおぼしつゞけらる
（葉ノ信人）いたく雪侍りぬとやきげ、（葉）おすがれさしてたち給ふ
りなきてけるる

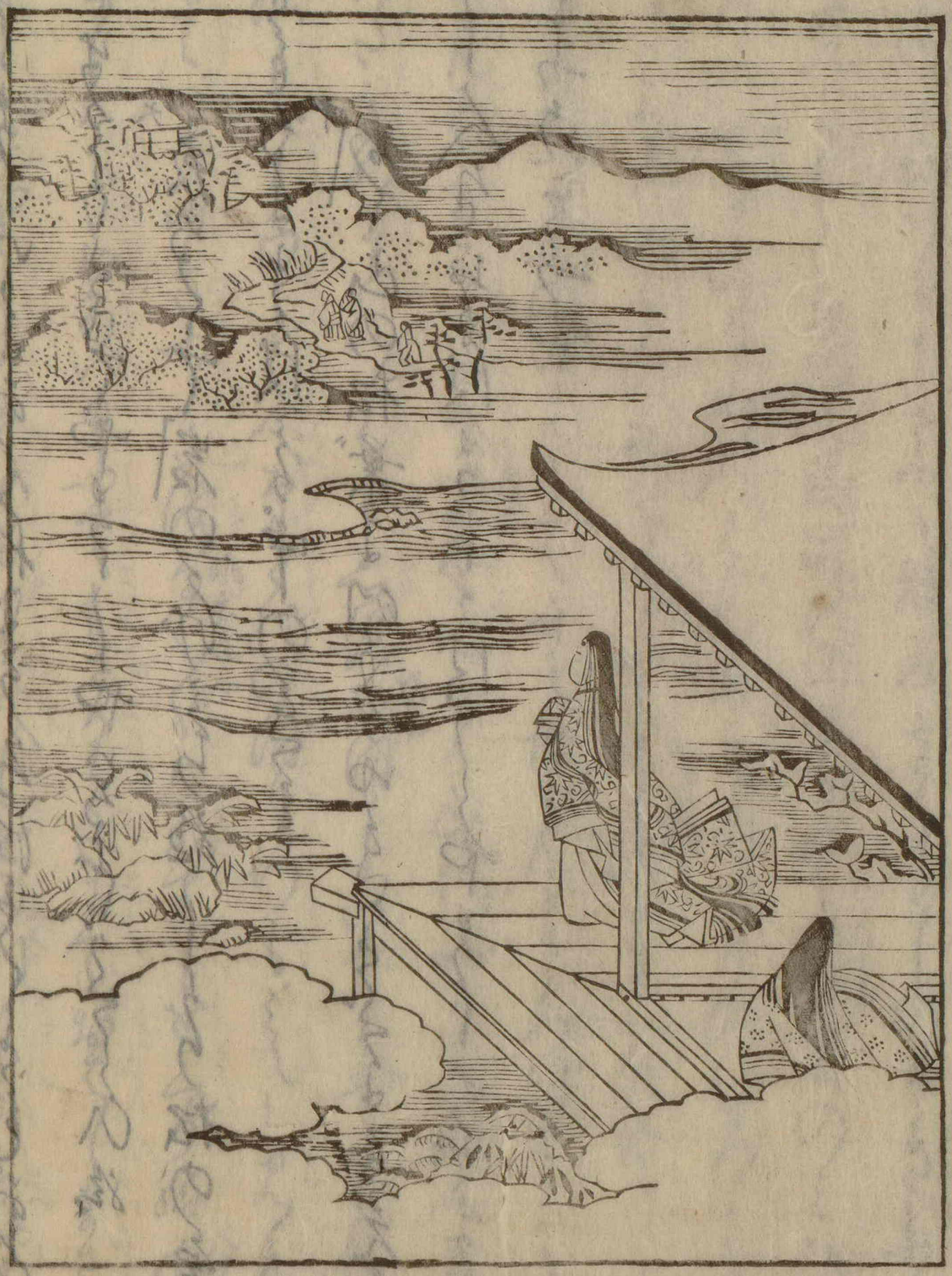
蓋 煩ざりのたれぬ雲ぬまいとゞしくこれ世後
かりといひ志しすしん。兵 白 地又 の心やまた 蓋ノ いめん志給
とさけ。まづ此志ざりのれこと後あれかひぐさま
し給。今 白ム いさりともこころやすきをとおぼして 白 家
をもんどろま罪て給かりたるまされかへりもきこと
まらゝ川ましきるまを 姫宮庭 安がるいおぼいたり。 白ノ よかり
いといたうすきのへるれ名のひろごりてこれまし
くえんまおぼさりべかめるも 姫宮庭ん いとうげもれたり
すぐしのしるこうさしいでたんて 久ノまた 川きも。
いりまうぬくしくふかめきたんなど。おもひ
くれしのへりさてもあきましうて。明くしきるに

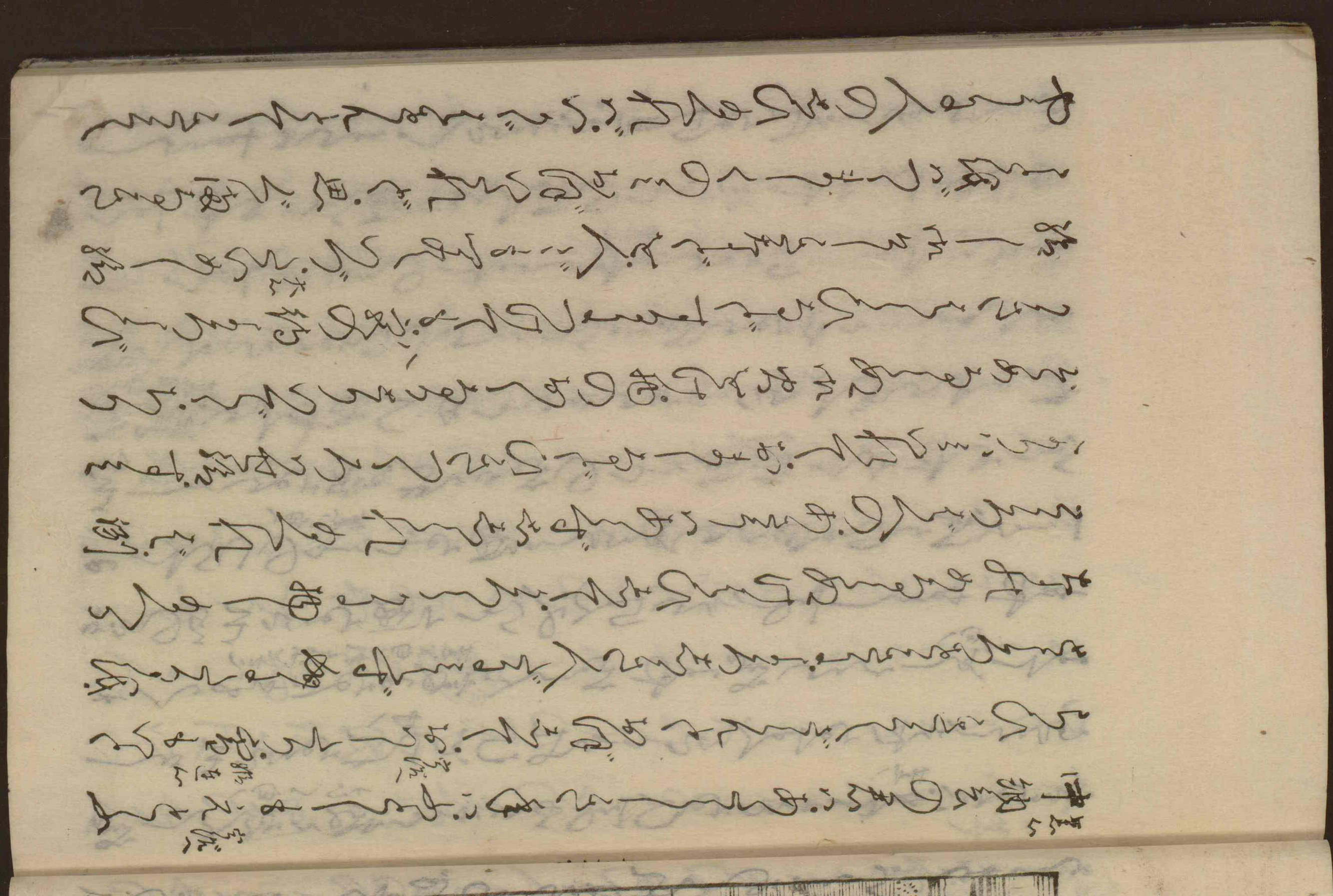


なくてゐし給ま。そしもくれまそり雪霰（ゆきあれ）ふりしく
比もいけくもかくこそもある風の喜なれど今りじ
めてしいりたん山径の心ちし給。女（宇治ノ）ゐらるぐ哀
そしハかくりなんとす。そろぼそくゐるしきこと給
あしたまるべき事待出しぞと心をけさずいふも。
ありがたきことかれとさ（姫宮ノ）給。むかひの山まも。時ぐの
小会佛にてもり給しゆへこそ。ひとも来りかひ
しが。何ぞりもいかぐとたゐるまれまをとづれ
たゝもれどいまはなましまかれ。
いとぐひとめれたしたゐるも。さるべきことにしか
がらいとゐるしくるん。何ともこざりしやま



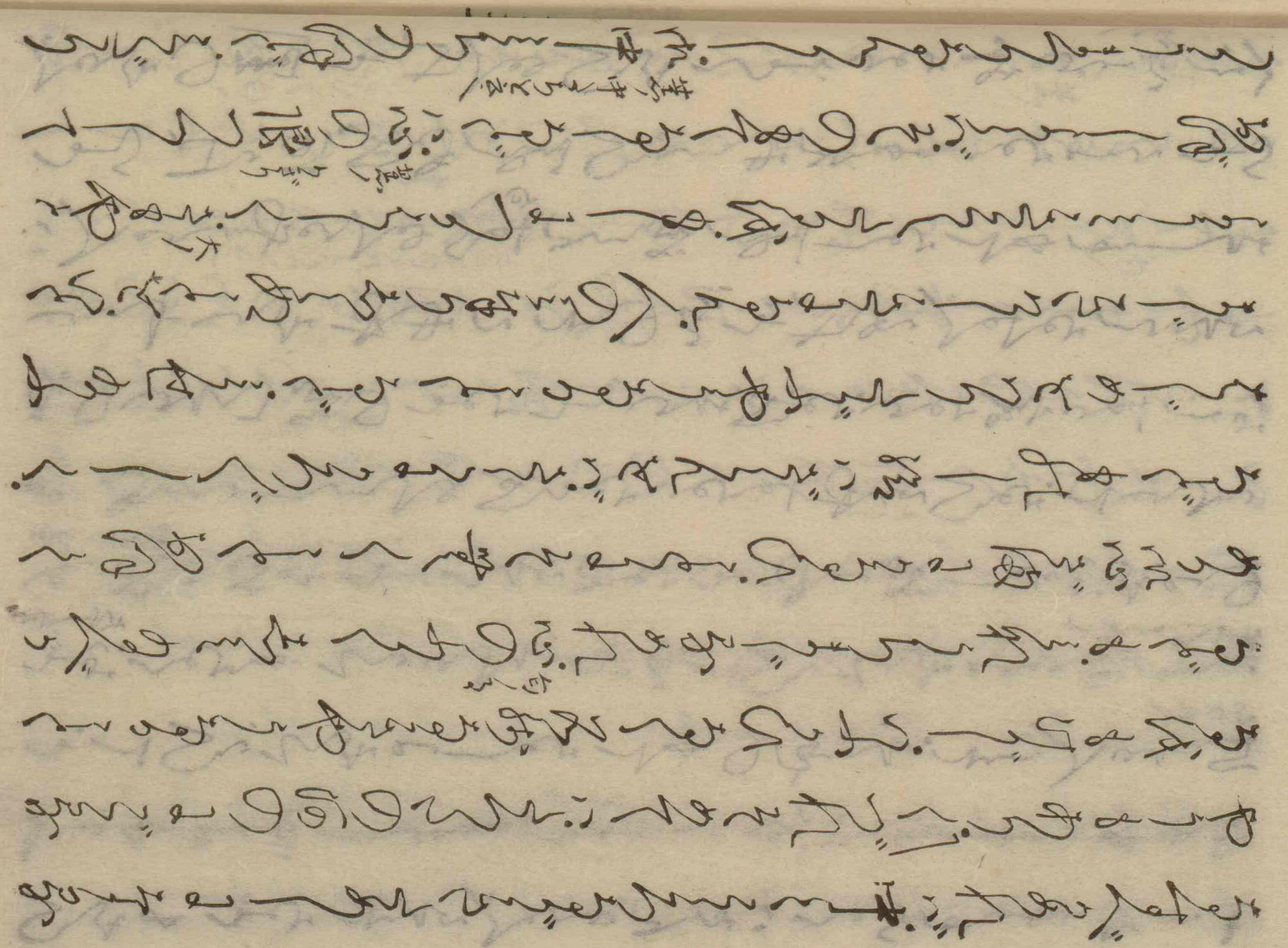






給、うちとくとはちまけ過ど、さまざくうちはすこし
云の葉づゝて、拙なさの給へるを俊びとめやすく
うるさくづくしけるうゞや(葉ん)うまその意つえずぐし
きつまじとむるを給ひける、ひとうちつけるかころかれ、
打かうめべきよるらむかくむひぬめへり、家乃(葉詞 白く)
ひとあやなく根給(うゝ)ひの仲かれ、哀なりし此八
一こゝ成うけと母かうをさまく海るまゞ、この(葉ノ白へ)つゝでゝま
まやかましみそうけん、又いと海なりされ心のさか
まて、(白ノ)ざしらう給ひや仲しん、家まなかん(葉と白ノ教く旅とそこ)ともりく大
ふさしきせるすべきとされ、ひとつれ(中ノ)なりされそし
きなかは、(葉ノ)まてさとなるひみまゆうでと、家く(さびく白ノ)ゐんで給

へだ心(葉ノ)より外なることしたひまへれど、室のたるべ
いとこゝろなうもえあしがひ罪ぬ後、何かはいと
さしもまてなし罪ゝ給ふん、ずい(句ノ)のへるやうなんハ
ふうてなすべかめれど、心のそこあやしうふう
おもすう家なりぢ後さりごとなどの給ひてりの心
がろうてなびきやするるなど後めづらしかるも
のまゝおさし給ふやとなんきくことも侍り、何ぞす(世上ノ事を)
まもあるまゝにがひて心をしろかゝもなく、おど(大やうなり)
けしる人こそ、こゝ世のまてなしまゝにがひて、と
あるもかるもなれめるこゝろし、すこし心まこがふ
つしあるまもいかゞハをん、さるべきぞなどもたひ

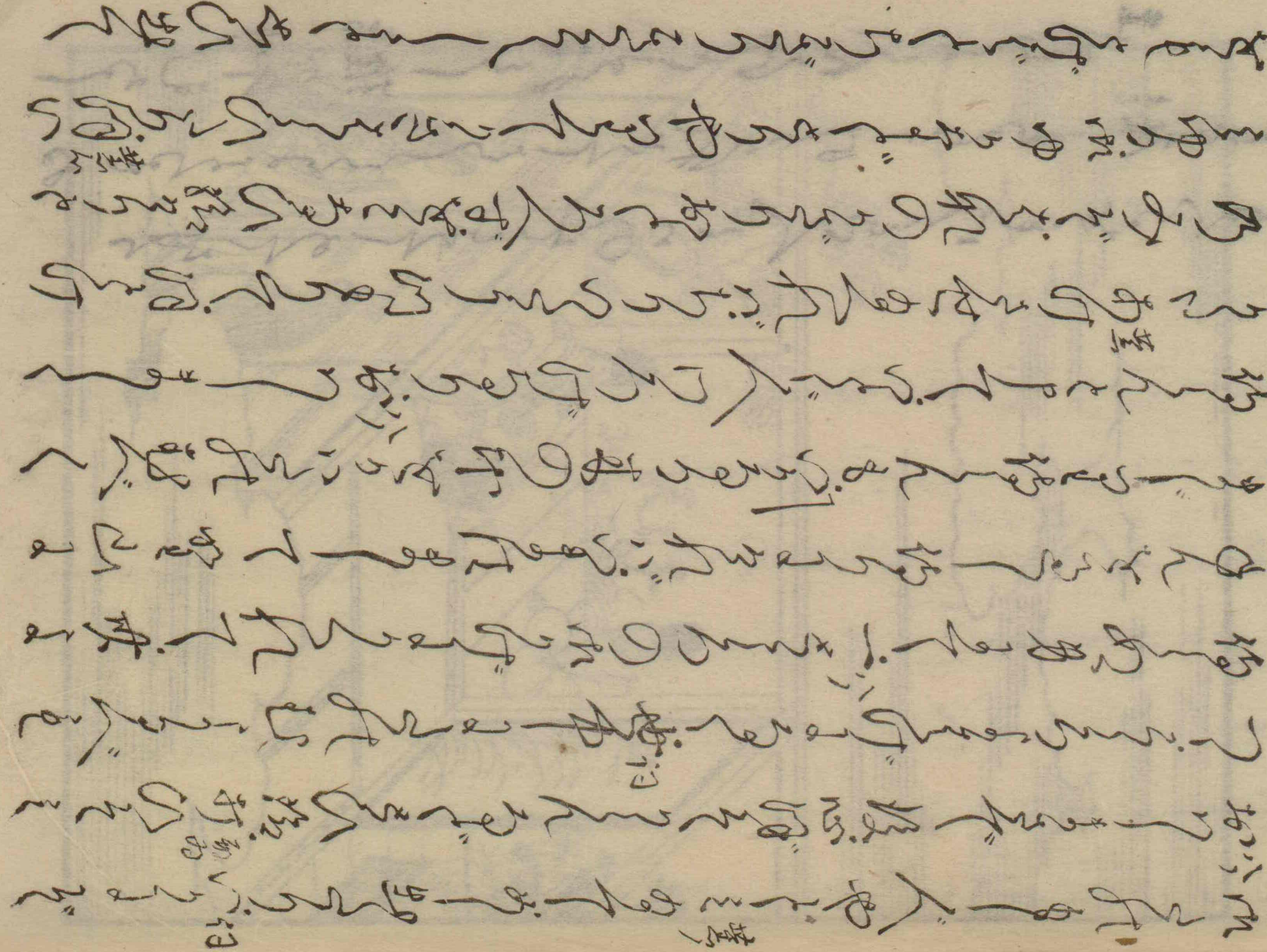


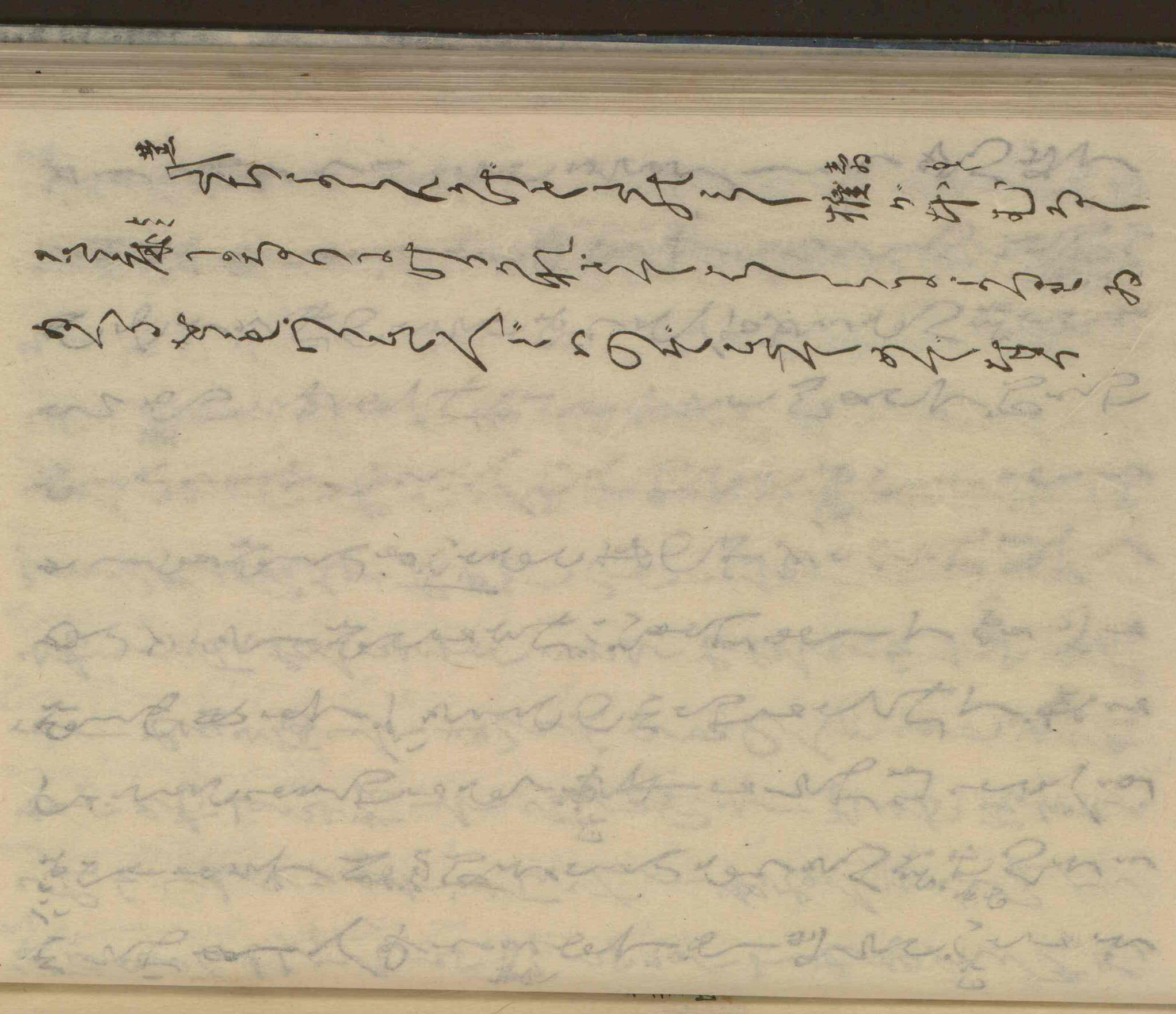
あ(呈)しそいてくらめとぶとまめやうそいひで
のゆへば(大心)ワがれこげからのことくしおぼしもかけ
ぞひとれおやめさそいくんかしとおぼし
めぐらしさまへど・ゐ紙いふべきことのしもなさ
心ちしていかまとかしけくしげよの給ひで
くるま・中こきこくんことも覚て行くでとうち
ワひゆへるも・おひしらるるもれからけらひおう
きうしきも・必(意詞)れこづらしさくしめしおふべきこ
とこもきひゆへず・それハ雪をふこかて・寄りこさるる
ころざしげりをれらんじワむ・れこれかこごろ
まてもすぐさせゆそよりしがれ(自ノ)れころまをハまる

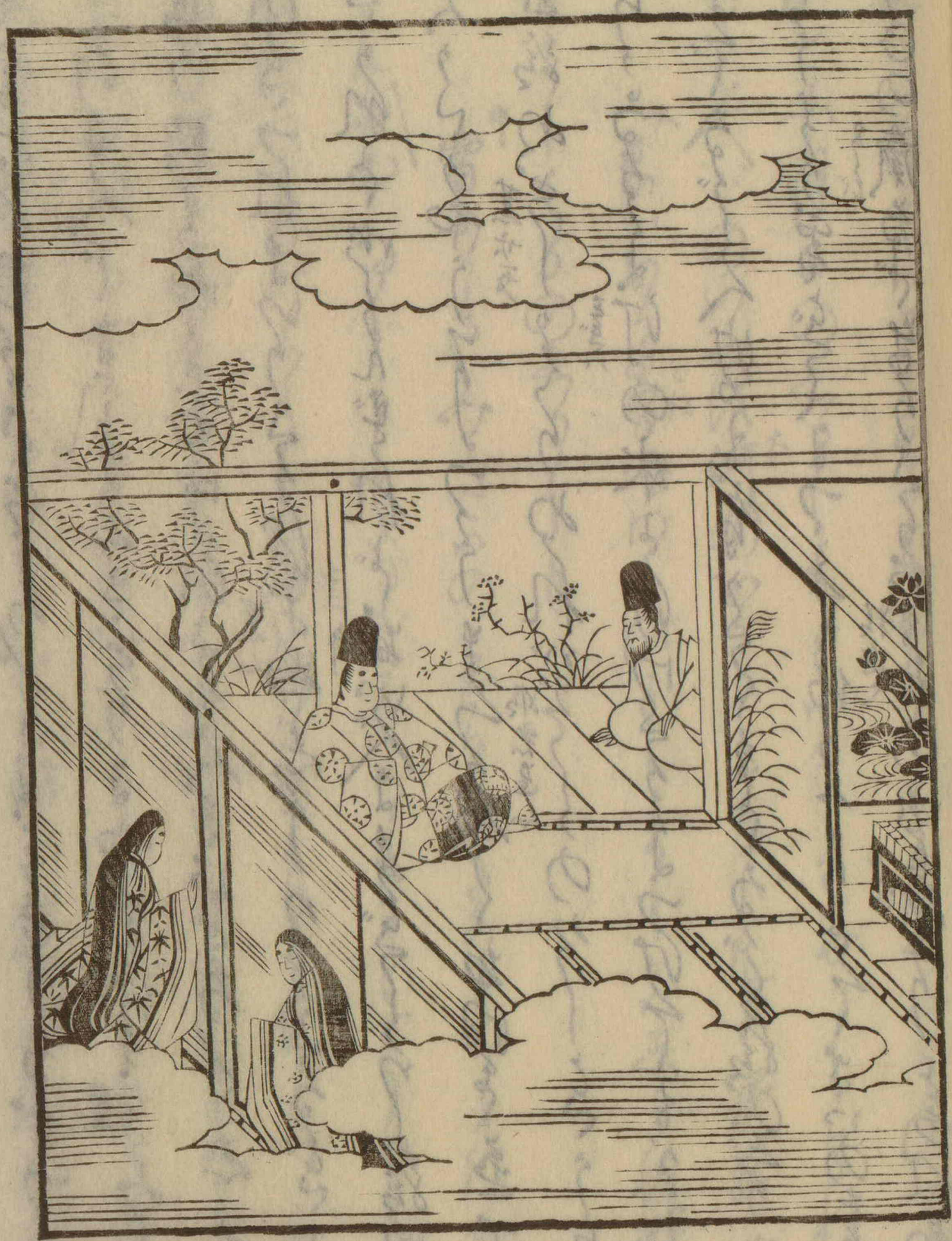
こくまぞたんべかつはのつるの絵さ夜もたんべかつと
しどひさやされも人の目さ覚しげうさこゝちあう。
地図ちらじはいづるまかハきこし絵とらひ戸絵ま。
大仏
かうぞてうそうかれまもきこしざりけう行やちられ
どうりの絵まもびかまちづしうむれつかれまし
とかまえうくへやつも絵らず
大
雪かさ山のけちし君ちゝで又かとくよ
絵とこぬびどうまてさし出かくれバ蓮阿地もれあう
がひそ。中ところうとられ待ちめべられとて
蓮
けらくとちがこ夜かさきてく山河とさうべしが
てくまがやつらん。さくげしもかげさん こゆう

たるしもおきうハ侍らじとこそしぬへだ。大ム おも
ふずる物志うちなりて。ことはいふへ給ふず。けぎや
うまいと物ど後くすこしうさ海にはえし給ふるぞ。
いまやうのワ人たちのやうに。えんげまもまて
なきでいとめやすくのどうなる心だへなるんとぞ。
としたられ給人のれけちひなる。芸ム ううこそハあら
まほしくれとおもふまこがちぬ心ちし給。ことは
かれて気色だらこうるも。大ノ志ふずがかなるさ海にのこ
もてちるしぬへだ。芸心ちづしうて芳物鏡なぞとぞ。
もれまめやうに罪し給。くれたてなばゆきいとぐ更
もとぢぬべう侍らと此とものへぐこそびくれば。

葉
くり給なんとて心ぐるしうながめくらさるくれ寸
まねのさ夜ちりや。さぐ山里（葉ノ京ノ住居と云く）のやうにいとしづか
なる所の人もゆきまじらぬ所に侍るを。（大ノ）さも御覧し
けばいかるうれしく侍らんなどの給も。いとめでこ
るべきことかれとうるこくにきてうち忍む女
びらのある代なりれ君をいとこぐるしういかり
さやうにはなべきぞとこきてねぬるり。れくぞ。れ
よしあるさ夜にてまいりれとものへぐにもさられ
などめやすき程にて。かはらけさし出させ給ひり。
れれうつりがもてさはがれし。無ねべぞ。かげら
ひけとりいふつらつき。心づきなくてあるよりれ乃







日當ぬれば、ちりきとろぐに、こきうなどつう
まいる人ぐに、こまくきとりにやつまけり、蒸みも
たり給ちぬに、ゐ中びたり人ぐ、おどろくしく
ひきつれまいりたる後、蒸おやしうりしたるきに
ざれとゆらんぜれど、弁おいべにまぎらりし給ひ、
大かたやうりつうまつるべくおほを垂て
出給ぬ、蒸廿夏どしかたりぬれば、姫宮達のそしきうら
らかなるに、汀(しぎハ)の氷とけひたるにつけても、かう
までなげ人けるも、有がたくもとなげ給ひぞりの
ぐうより、雪ぞしまつて、ゆるとりとて、さいのをり、
こゝの蔵(ほとび)などまりたり、いもゐ(糒進之)の御蔵(ごい)りとあれば、

所につけてはかくる事のかしこまりしさまざまひて
りふ月日のしるしもしゆりしてかりしかれ
なぐ人ぐのいふ浅河(大)のありしきちゑんと事給
大 君がある蓍(えは)のひとしまましかばしられや
せましもうのしるしも
中 雪ふりさみぎいのこぎり誰にあるつゝかはや
ざんおやなるしまして、ちどもうちゑさことをうらゝる
らひつゝあけらし給中(葉)納言殿よりも白(安)よりも
ありすぐさずとふしひ四人給(地)ぐりさくちゑまとちゑさ
しくおほりるやうちゑれば、れいのりさまましこる
なあり、芸(たるざうり)盤の比、白(安)がぎしをあばし出てまありし

宮語しおぶちかぎりもして此人ありしハいさこの比
住給ひまでもえずなりましとちぎり給ひしこの
あられどくらぶべくもなきかなゆかしさをばされたり
白 川でまうし宿の桜どうれ春ハ露へだてたり
てくざく柴ども心をやりぬその語へつらりおつましき
まぎられもう語ちぎりしぶとつれぐるあきまでうき
あはれかくのうらくべりをまてけらしとて
中 いびくさく給てあらん其宗よ露とこめらる
宿の桜どう代くさしもちてつれるさゆ気色乃
とゆれバましゝよろうしと思ひしつられ心よ
あまりあてしハさゞ中納言をとど候りうざ候よを給

ひまひ何(白)くれとまれさはがしきまゝまぎれて宇治(うぢ)
のけうりを久しうまづれ望たまりず。(蓋ん)まゝめやかたすな
人のれころはまるいとことなりかれがいとのぞうる。
それが拘とはうちとのこゝろがし。女の心ゆるび給ひ
ざらん限はおぎれぞこゝ情(なさけ)なきさ海まこしじと
ちひつゝ若(むく)のれころけまれぬるをぶくこゝし里
ぬへとおぼさそのせしつねよりもあつさ氏人けぶ
なまかはづゝすぐしかんやと思出てまはりま
まうでおへり。給すぐこれはどま出おひかれがあや
くまさしくる日かげまばゆくて。(八)宮のおたせし
西のひさしま。夜ぬぐめし出ておりすそなるの

御のひさしにあるみくめし出てお

七二十七

あるやの僧の山まへにまかりて抽し給ける夜けちう
ぐしとて我はくるまにてまり給ひけるひしのび
されども、そのづしうちしろう給ひてくちをしき
なれば（蓋石）ちる波あるしはしつるにまかりてみさうじの
もしのくるまにけがるるかるる所におちるれすゑしあさ
こる夜にさちさしつまへりぬれば、とりにそでなる簾をせ
羽やつまでに給ひてまつるに車ををへとてしろお
家にあしとおもひてのちくるあらしも風のすゞれ
せいうう嘆あるべかめれば（ゆく人詞）おもしいでもこそあれ、その
御車をさし出てとくとりの人あまりおもたげなりし
を、かみてうれしうて給へばくるまをこすくきても

末松をふくまれすまをしよきて、これさうじる
むりひておきたるさうじよりおるるまをとらん
とあるりかり先(中)ひさり立出て、事よりさしのぞき
て此れともの人ぐのぞうのちがひすぐにあへる後
に給ちりかりぞきまび色のひとへに、くれざうの
そう夜のまてきやしたる、中こさ夜かりて、茶やか
ありとこゆるハきるしぬる人がらあり、おび
たらあげるしるしてずぐひさかくしても給へり
ひとそんびやうに猶科(やうぐい)ありしげるる人のかこうち
きますしたらぬ程ならんとこゝて、来まぐちり
のまよひあくづやくとこちこうしけらしげるる

うるはしめなどあからうしげとえて。旬ひやうま
やりうるおほどさしろけらひ。無一変もかうざ海
まぞおもすべきと。ほのこなりしも出くべられて。
うちなげうる。大まるゐざり出て。波(かれ)さうじいおしは
まもあれとこをとせ。ゆへり。可(よう)さうちとけしぬ
き海志てよしあしんとおぼゆ。うしらつきかん
ざしの程。いますてしあてまる海めしき程なり。
内ノ人詞
あるるまに屋ばもそへてしてて侍り門。いそぎ
ちしものぞき給ちじと。けりきへぞ何心なくいふ
ありいそじうもあるべきけぎれとてうしろめる
げるゐざりいり給ほどけしかう心まくきけらひ

そひてこゝ。ぐろきあんを一かさね。おろしやうなる
女あひをさゝめへれど。これはなつしうる海めさて。
衰げる心ぐるしうおぼゆ。かみさびゝかなる程に
おちゝろなるべし。束すくしほそりて。いろなり
とかいふめる。ひすいぐちていとおかしげに。いと紙
よりかけゝるやうなり。むらさきのかゝまかきゝる
程をかゝてまもちゆくるてつき。かれ(中よりこ)よりも(大)ほそ
き海さりて。やをくなるべし。ぐちゝりつゝ(中)きゝこゝ。
さうじぐちまゐて。何夏(なにごと)よりあらん。こゝるこゝを。
こゝをさてけらひ。いとあひぎやうつきゝり

69038
6AP78